

未来^眼とうほく 第20回

地方創生、グローバル化をリードする大学に

山形大学は、1949年に、山形高等学校、山形師範学校、山形青年師範学校（以上、山形市）、米沢工業専門学校（米沢市）、山形県立農林専門学校（鶴岡市）を母体として設立され、現在は6学部、1万人余りの学生を有する東北屈指の国立大学である。また、世界初の白色有機ELの開発（1993年）、ナスカ地上絵研究における日本初の現地拠点の開所（2012年）、北海道・東北初の重粒子線がん治療施設の整備開始（2014年）など、地方に立地しながら世界最先端の研究に数多く取り組んでいる。今回の対談では、2014年4月に就任した小山学長にお話を伺った。

山形大学卒業生で初めての学長

●町田 学長は、貴学を卒業した初めての学



小山 清人（こやま・きよひと）

1949年秋田県すさみ町出身。1974年山形大学大学院工学研究科修士課程修了。同年、山形大学工学部助手に着任し、助教授、教授を経て、2004年4月から2007年8月まで山形大学工学部長および理工学研究科長。2007年9月から2014年3月まで山形大学理事兼副学長を務め、2014年4月に山形大学学長に就任。工学博士（東京工業大学、1982年）。専門は高分子レオロジー工学、超音波工学。

長と伺いました。そういう意味でも、大学に対する愛着はひとしおだと存じます。そのあたりの思いについて、まずお伺いしたいと思います。

●小山 私は、1968年に山形大学に入学しました。本来なら4年で卒業して地元に戻るところでしたが、大学院に残ってそのまま教員になりました。実は、教員になってからもいろいろと移籍の可能性があるのですが、やはり母校が良いという思いが根底に強くありまして、そのまま今日に至っています。通算しますと、学生として6年、教員として40年、2014年の4月に学長に就任して1年、計47年間、山形大学に在籍していることになります。ですから、自分自身は大学の一部品になっているというのが率直な感じですが、これから学長としてできる限りの努力をし、お世話になった母校の基盤をさらにしっかりと固めていきたいと考えています。

●町田 プライベートな話になりますが、和歌山ご出身の学長が山形の大学に入学されたきっかけは何だったのでしょうか。

●小山 私は、地元の高校を卒業しましたが、当時の先生から、代用教員をしながら教員免許を取ってはどうかと指導を受けました。そこで、地元の中学校の代用教員をしていたところ、同僚から、教員になるなら大学に行った方が良いと言われて、1年後に大学に入った次第です。なぜ山形大学だったかといえば、特に理由はなく、端的に申し上げればそこしか入れなかったからです。

●町田 ご謙遜されていますが、学長が入学された貴学工学部は、1910年創設の旧制米沢高等工業学校（1944年に米沢工業専門学校と改称）からの長い伝統があります。そこで学ばれ、教鞭をとられ、そして学長になられました。やはり何か深い縁（えにし）があったのではないかと思います。

●小山 そうおっしゃっていただけると光栄です。

ますます求められる大学発ベンチャー

●町田 山形大学工学部といえば、帝人株式会社を生んだ大学という印象が非常に強いですね。また、全国に先駆けて、有機ELの研究に注力されています。これからの日本の製造業は、研究開発型の産業に切り替えていかなければなりません。かつて先生の研究室を拝見した際、米粉からパンを作る研究をされていて大変驚いたことがあります。それは農学部が行う研究ではないかと思ったからです。どのような発想から生まれた研究だったのでしょうか。

●小山 もともとは、農協関係の方が、米粉からパンを作りたいという思いで、あちこちの食品の専門家に相談していたのが始まりです。当初は技術的に不可能といわれていましたが、私が知り合いの食品の先生からその話を聞いたとき、自分の専門分野を応用すれば、もしかしたらできるのではないかと思いました。そこで、研究室の学生に話をしたら、みんなから「ここは工学部で、農学部ではありません」と断られてしまいました。

●町田 先生よりも学生の方が、頭が固かったわけですね。

●小山 そこで、当時、私の研究室で秘書をしていた東野さんという女性の方が実験を始め、試行錯誤の末、製品が完成し、特許も取得しました。その後、2002年にパウダーテクノコーポレーション株式会社という会社を作って、東野さんが秘書を辞めて社長になりました。山形大学では初の学内ベンチャー企業です。

●町田 それは素晴らしいサクセスストーリーです。日本の人口が減少し、企業の数もどんどん減っていく中で、今日の社会的ニーズとして、アントレプレナー（起業家）の育成が強く求められています。

●小山 おっしゃるとおりですね。

●町田 新しい事業を起こす母体はどこが良いのだろうかと考えますと、まずは大企業でいろいろな研究を行い、それからスピノフし、独立して起業するマネジメント・バイアウトに発展させるスタイルがあります。次に、大学発についてもかなりの可能性があると思っています。ただ、大学発の場合は、マーケティングが弱いので、せっかく良いシーズがあってもなかなか事業化できないという問題があります。一方、われわれ金融機関は幅広いネットワークを持っていますから、いろいろと事業化に向けたお手伝いができるので

はと考えています。

●小山 確かに、大学発のベンチャー企業にとって、マーケットとマネジメントとマネー、この3つのMが問題です。私はこれまで2件、ベンチャー企業設立にかかわったことがあります。1つは、先ほどのパウダーテクノコーポレーションです。当初は技術移転による物づくりだったのですが、販売面にも手を出そうとして経営上の問題が生じ、2006年に特許などすべてを、天童に本社がある会社に売却しました。もう1つは、CAE（computer aided engineering）といって、コンピューターを利用して、製品の設計をしたり、数値解析によって製品開発を支援したりするシステムの会社です。しかし、この会社は技術屋の集まりでしたので、営業力が不足していました。そこで、秋葉原に本社のある企業に買収してもらいました。

●町田 大変かと思いますが、チャレンジが重要だと思います。

●小山 ありがとうございます。これからも、大学発ベンチャーに力を入れていきたいと考えています。

地域において高まる大学の存在感

●町田 ご存じのとおり、昨年あたりから「地方創生」という言葉が盛んに使われるようになりました。そう



町田 睿（まちだ・さとる）

1938年秋田県生まれ。東京大学法学部卒業後、富士銀行に入行。同行取締役総合企画部長、常務取締役を経て、1994年荘内銀行取締役副頭取、95年取締役頭取、2008年取締役会長を歴任。09年10月よりフィデア・ホールディングス取締役会議長、北都銀行取締役会長、11年6月より荘内銀行取締役相談役、12年6月よりフィデア総合研究所理事長をそれぞれ務める。12年4月より2年間、東北公益文科大学の学長を務め、14年10月に同大名誉教授の称号を授けられた。



山形大学「学生大使」

した中、貴学と、私が以前学長を務めた東北公益文科大学は、文部科学省の「地(知)の拠点整備事業」(COC)の採択を受けています。大学として、“知”が産業に結び付くような良いリードができれば、地方創生につながるのではないかと感じています。

●小山 おっしゃるとおりですね。2015年度は、COCに続く「COC+(プラス)」というプロジェクトの公募があります。これについても公益大と連携できればと考えています。

●町田 ぜひよろしくをお願いします。ところで、貴学では東日本大震災を契機に、本部直轄の東北創生研究所を立ち上げられましたが、どのような状況でしょうか。

●小山 東北創生研究所を作って4年経ちましたが、モデルの検討が終わり、実践段階に入るところです。これからは、具体的にどういう形で地域の役に立つかが求められますが、特に重点を置いているのが最上地域です。

●町田 最上町は、バイオマスが結構うまく進んでいますね。

●小山 そうですね。今の大学の教員は、以前と比べて、地域に入って行って地域の人たちと話し合うといった活動を積極的に行うようになったと感じています。

●町田 それは非常に良いことだと思います。

●小山 少し話がそれますが、工学部の歴史を紐解くと、当初、米沢に学校を誘致するために、地元の人たちが話し合って自ら立ち退きを決め、土地を更地にして国に寄付したそうです。今では考えられない話です。私が工学部長の時に、宿舎だった土地の一部を財務省が売却しようとしたことがありましたが、市民からクレームが来しました。自分たちが供出した土地で成り立っている本学への期待が、100年経っても続いているのです。ありがたいことだと思います。

●町田 素晴らしいエピソードですね。

外国の価値基準を理解することが必要

●町田 グローバリゼーションについてお話を伺いたいと思います。貴学には各国から留学生が来ているようですが、何人くらいいるのでしょうか。

●小山 200人くらいです。決して多くはないと考えておりますので、山形県に対しても、2020～30年に向けて目標を作ろうと呼び掛けています。

●町田 これからわれわれが海外へ出ていく上でも、留学生とのつながりは非常に役に立ってくると考えられます。

●小山 現代社会においては、日本以外の国の考え方や価値基準を理解しなければなりません。ですから、できれば学生の中で、“日本人学生”と“留学生”の区別をなくしたいと思っています。

●町田 それは良いお考えです。ところで、当社の機関誌では今号から、貴学にご協力いただいて、貴学を卒業して山形県内の企業に勤めている留学生OB・OGに寄稿していただくことになっています。

●小山 留学生は結構山形に就職しています。もちろん途中で辞めて母国に帰る人もいます。母国の職業文化が日本のように終身雇用を前提としていない場合もあるので、難しいところですね。

●町田 そうですね。私は以前、富士銀行(現在、みずほ銀行)に勤めておりましたが、人事部時代に中国に拠点を出したとき、地元の中国人を多く採用しました。そのローカルの人たちを、一生懸命育てようとする力を入れるのですが、一定のスキルを身に付けると別の職場へ移ってしまうケースが多くて、ガッカリしたことがあります。

●小山 お気持ちはよく分かります。本学の卒業生で博士号を取った者が、私のかかわっているベンチャー企業に2年くらい在職していましたが、突然辞めてアメリカに行ってしまいました。アメリカでは電機関係の大手企業で働き、日本や中国の代表者なども務めました。そこからまた別の会社に移って、現在はある会社のアジア責任者を務めています。職を転々とする一つの典型例ですね。

●町田 もっとも、過去はともかくとして現在は、そうした状況を肯定的にとらえた方が良いのかもしれないですね。辞めた人とも必ずどこかでつながりが出てくるでしょうから。

●小山 おっしゃるとおりですね。辞められた時には、

裏切られた気分でカチンと来ることもありましたが、今後は、そういうことを前提として考えておく必要があるでしょうね。

火が付いたら消えない備長炭のように

●町田 ところで、地方創生もグローバルな競争も、結局は人材次第だと思います。大学には、そうした人材を育てる役目があると思いますが、そのあたりを学長はどのようにお考えでしょうか。

●小山 学生が地域に出て、地域の人と共に議論しながらその成果をまとめていく機会が多くなりました。ほとんどの学生が1回はそうした経験をしています。特に、本学は最上にサテライトキャンパスを置いているのですが、教育委員会ともうまく連携しており、学生を送り込んで、いろいろな地域の課題と一緒に考えています。今後は、こうした動きをさらに推し進めていきたいと考えています。これから飯豊町に有機エレクトロニクスの研究拠点を設置する予定ですし、県内のどこにも学生がいて、どこにも教員がいるという姿が、私の理想とするところです。

●町田 なるほど。若い人のエネルギーは大きいですから、地域にとっては重要でしょうね。

●小山 あまり良い表現ではないかもしれませんが、東北人の気質は備長炭に例えられると思います。なかなか火は付かないけれども、一度火が付いたら消えないということです。火を付けようと一生懸命努力をしています。

●町田 それは的を射た例えですね。

●小山 東北、また山形の風土は、東京など都会に比べてゆっくりしているのが強みだと思います。ころころ変わるものに惑わされることなく、ゆっくりと火を付けて、火が付いたらずっと燃え続ける、そんな、備長炭のような人材を本学でも育てていければと考えています。一見慌ただしく見えるベンチャー企業も、ゆっくりとした環境にあれば、むしろ長続きするのではないかと考えています。

●町田 いいお話を伺いました。

自然体であることが楽になる秘訣

●町田 最後に、プライベートなお話を伺いたいと思います。文部科学省の制度改革で、国立大学における



山形大学のインドネシアサテライト(ガジャマダ大学)

学長の権限が強まり、マネジメントなどで日々大変なご苦労をされているかと思います。何かリラックスするためのご趣味などがありましたら、お聞かせください。

●小山 最近の趣味は、学長宿舎の庭で農作業をすることです。結構広い庭ですので、いろいろ庭いじりをしています。

●町田 それは良いですね。やはり植物は生き物ですから、成長していく様子を見るのは楽しみです。

●小山 精神的にもリラックスできます。冬から初春にかけて、梅の花が咲いて、そこに雪が積もる姿は美しいものです。また、庭からいろいろな芽が出てくるのも心が和みます。私は雪がほとんど降らないところで生まれ育ちましたので、雪は毎年楽しみです。

●町田 座右の銘は「自然体」と伺っていますが、どのような意味が込められているのでしょうか。

●小山 座右の銘というほど大げさなものではありませんが、一つの拠り所になっています。今回、結城前学長の後を受けて、次期学長に選ばれたときには大変緊張しました。しかし、就任が近づくにつれて、自然体でいこう、自分はそのままで良いのではないかなと思うようになりました。ですから、4月には、比較的楽な気持ちで学長に就くことができました。自然体であることは、自分自身が楽になる一つの方法ではないかと考えています。

●町田 学長のお人柄がしのばれる良いお話です。

●小山 あと、横山大観の『無我』という絵が大好きです。実物は、鳥根県安来市の足立美術館にあります。複製画を自宅に飾っています。眺めていると、肩の力がすっと抜けていくような気がします。

●町田 本日はいろいろと興味深いお話を聞かせていただき、ありがとうございました。